*Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2000, Vol. 47, 421 − 428.*

# 大学受験の合格可能性の認知と意思決定

## ── 高校生データによる探索的研究 ──

元　吉　忠　寛[1)]

## 問題と目的

今や，大学・短期大学への入学志望率は50%を越えている。18歳人口の減少によって1990年代前半のような激しい受験戦争の時代は過ぎたものの，適性や興味に基づいて希望する者が希望通りに大学に入学できるという，学生の配置による進路決定の時代までにはしばらくかかりそうである。大学受験は，受験生にとって重大な意思決定場面であり，人格発達的側面においても重要であるといわれている(下山，1984)。大学進学の意思決定過程については，大学へ進学するのか就職するのかを決定する第一段階と，それに基づいて特定の大学・学部を選択する第二段階とに大別される（権藤，1974；渕上，1984 a)。

第一段階については，多くの研究が報告されている。例えば，井上・上野・野口（1975）は，地域差，性役割期待による男女差，能力主義への考え方や受験体制の順応度の個人差といった観点から就職希望者と大学進学希望者の高校生活の違いについて検討を行っている。また渕上（1984b）は，大学志望動機には，「大学の本来的機能（専門知識を深めたい)」,「家族への配慮と規範機能（親孝行のため)」,「モラトリアム機能(周りの人が進学するので)」,「大学の副次的機能(大学でクラブに入りたい)」,「大学の経済価値機能（自由になるお金が欲しい)」の５つの因子があることを見いだしている。

第二段階である特定の大学や学部を選択するという意思決定も重要な意味を持ち，この段階における動機についての研究も報告されている。権藤（1974）は，高校生が志望校選択において「人生設計」,「自分の性格にあっていること」,「入試に合格できること」の３つを重視することを示した。また，渕上（1984a）は，特定大学の志望動機には「志望大学の内容の充実」,「志望大学の経済的・地理的要因」,「自己実現への適合」,「入学の可能性」の４つの因子があることを見いだし，これらの因子と人的な影響について検討している。

ところで，大学受験は入学試験による選抜が行われ，不合格というリスクをともなう。権堂（1974）や渕上（1984a）では，志望校決定の動機として「入学の可能性」という要因が見いだされていることからも，受験生にとって志望校に合格できるかどうかという問題は重要な意味を持つといえる。現在の受験生の多くは，予備校や出版社などが主催する模擬試験を受験して，自分の成績や受験する大学・学部の合格可能性を評価し，これらの情報を志望校の決定に利用している。自分の興味・関心のある専門分野への進学を目指す一方で，自分の学力を評価しながら，受験する大学を決定しているといえる。そして，下山（1984）が指摘するように，日本の大学受験は，進路を決定する際に学力成績が最も重要な要因となっていることは否定できない。このような中で，鈴木・柳井（1993）は，「適性重視の進路展望」と「学力重視の進路展望」という２つの基本概念を構成し，進路指導の立場から因果モデルを構築している。

しかし，大学受験をリスク状況として扱い，受験生自身がどのように自分の合格可能性を認知し，志望校の決定を行っているかという研究は少ない。その中で，田中（1995）は，大学生を対象とした調査から，大学受験において客観的な合格可能性が主観的には慎重な受け取り方をされていることを報告している。また，元吉（1998）は，大学受験生を対象とした調査から，主観的な合格可能性は，模擬試験の合格可能性判定を基にして推測されており，主観的な合格可能性は受験直前には高く見積もられていることを指摘している。

本研究は，大学受験をリスクテイキング行動の観点から捉え，大学に進学することを決めた受験生が，特定の大学・学部を決定する際に，志望校の合格可能性をどのように認知しているかを検討することを目的としている。また，合格可能性の認知が意思決定に対してどのような影響を及ぼすかを探索的に検討することを目的としている。そのために，まず大学受験に関連すると考えられる

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

パーソナリティー要因と，特定の大学・学部を選択する志望動機，大学受験に対する認知，自己に対する認知などの変数との関連を検討する。さらに，それらの変数と合格可能性の認知との関連について検討し，大学受験の意思決定過程において合格可能性の認知がどのような影響を与えているのかを考察する。

## 方　法

**被験者**　東海地方の予備校に通っている現役高校3年生121名（男性47名，女性74名）を対象とした。多くの被験者は，国公立大学を第一志望とする学生であった。1998年4月に第1回目の調査を，1998年9月に第2回目の調査を行った。いずれも予備校の協力を得て質問紙を郵送し，回答後に返送するように求めた。第1回調査は117名（男性44名，女性73名）から，第2回調査は74名（男性24名，女性50名）からの回収を得た。

**質問紙の構成**　第1回目の調査には以下の質問項目が含まれていた。大学受験と関連するパーソナリティ要因として，達成動機測定尺度23項目（堀野，1987），テスト不安傾向を測定する青年版テスト態度尺度20項目（荒木，1988），内部制御-外部制御を測定するI・P＆C尺度（Levenson，1981）を翻訳した24項目の3つの変数を用いた。達成動機尺度は「1．全然あてはまらない」から「7．非常によくあてはまる」までの7件法で，青年版テスト態度尺度は「1．ほとんどない」から「4．ほとんどいつも」までの4件法で，I・P＆C尺度は，「1．非常に反対」から「6．非常に賛成」までの6件法で，それぞれ回答を求めた。また，特定大学選択動機尺度（渕上，1984a）に新たな項目を加えた17項目，模擬試験に対する認知9項目（e.g.，模擬試験の偏差値を重視している），志望校に対する認知7項目（e.g.，第一志望の大学に合格することは重要だ）に対しては，「1．全くあてはまらない」から「5．非常にあてはまる」まで5件法で回答を求めた。また，大学受験に関する自己認知8項目についてもたずねた。これは，「大学受験において，あなた自身は以下のそれぞれのものを，どの程度持っていると思いますか」という設問に対して，「運の強さ」，「受験勉強の量」など8項目に「1．全く持っていない」から「5．非常に持っている」までの5件法で回答を求めるものであった。さらに，第一志望校を記入させ，その合格可能性を数値によって回答するよう求めた。そして，一般的な確率判断における認知的な歪みを測定する項目（予備校の模擬試験で合格可能性が20%，50%，80%と判定されたとき，あなた自身はその合格可能性を何パーセントくらいだと思うか）と，大学受験に関するリスク志向性を測定する項目（もし一年間に1校しか大学を受験できなかったとしたら，第一志望の大学の合格可能性が何パーセント以上あればその大学を受験するか）を数値によってたずねた。第2回目の調査では，第1回目調査の中からパーソナリティ変数の尺度をのぞき，以下の項目について回答を求めた。特定大学志望動機尺度，模擬試験に対する認知，志望校に対する認知，大学入試に関する自己の認知，確率判断における認知的な歪みを測定する項目，大学受験に関するリスク志向性を測定する項目，第一志望校とその合格可能性であった。

**客観的指標**　1998年5月と8月に行われた予備校の模擬試験（マーク式）の結果を用いた。客観的合格可能性として，模擬試験の合格可能性をもとに，A判定からE判定までの5段階を90，70，50，30，10 %に数値化した。また成績として模擬試験の総合得点の偏差値を用いた。

## 結果と考察

**尺度の構成**　既存の尺度については，先行研究や因子分析の結果とその解釈可能性から，以下のような尺度構成を行った。まずパーソナリティ変数について示す。達成動機尺度は，「人と競争することより，人と比べることができないようなことをして自分をいかしたい」などの項目を含む「自己充実的達成動機（$\alpha=.82$）」と，「他人と競争して勝つとうれしい」などの項目を含む「競争的達成動機（$\alpha=.78$）」の2因子とした。青年版テスト態度尺度は1因子とした（$\alpha=.92$）。この得点が高いほどテスト不安が高いことを意味する。I・P＆C尺度は，「人生になにが起こるかは，自分の力でなんとか決めていくことができると思う」など5項目からなる「内部統制（$\alpha=.59$）」，「なにか思いを遂げたいのなら，自分よりも上の立場にある人に気に入られなければならない」など8項目からなる「強力な他者による統制（$\alpha=.69$）」，「事故に巻き込まれるか否かは，たいていは運次第だと思う」など8項目からなる「運による統制（$\alpha=.76$）」の3因子とした。

次に，特定大学志望動機は，主成分分析（Varimax回転）の結果から4因子とした。第1因子は，「校風や伝統があるから」や「教授陣が充実しているから」などの項目を含んでいたため，「内容の充実（$\alpha=.82$）」とした。第2因子は，「自分の適性・好みにあっているから」や「将来の志望職業と一致しているので」などの項目を含んでいたため「自己実現（$\alpha=.44$）」とした。第3因子は，「合格の見込みがあるから」と「自分の学力水準でいけると思ったから」の2項目からなっていたため「合格可能性（$\alpha=.85$）」とした。第4因子は，「授

Table 1　模擬試験の認知の主成分分析（Varimax回転）の結果

| 項　　目 | I | II | $h^2$ |
|---|---|---|---|
| 模擬試験の結果を信頼している | .87 | .06 | .77 |
| 模擬試験の合格判定を重視している | .86 | .09 | .74 |
| 模擬試験の合格判定は正確だと思う | .80 | .07 | .65 |
| 合格判定は受験校決定の参考になると思う | .59 | .30 | .44 |
| 模擬試験の偏差値を重視している | .52 | .45 | .47 |
| 模擬試験と本番はまったく別のものだ | −.23 | −.17 | .08 |
| 模擬試験は必要だと思う | .20 | .83 | .73 |
| 模擬試験を積極的に利用したい | .10 | .76 | .58 |
| 模擬試験は受験本番に役立つと思う | .07 | .68 | .47 |
| 2　乗　和 | 2.87 | 2.07 | 4.95 |

Table 2　志望校に対する認知の主成分分析（Varimax回転）の結果

| 項　　目 | I | II | $h^2$ |
|---|---|---|---|
| 何があっても第一志望の大学へ行きたい | .86 | −.02 | .74 |
| 将来のことを考えると志望校に妥協はできない | .70 | −.19 | .53 |
| 第一志望の大学に合格することは重要だ | .69 | .30 | .56 |
| 自分のやりたいことは，第一志望の大学でないとできない | .60 | .01 | .36 |
| 自分の成績に応じて受験校は柔軟に変えるべきだ | −.03 | .77 | .59 |
| 自分の学力にあった受験をすべきだ | .28 | .66 | .52 |
| とにかくどこかの大学に合格できればよい | −.42 | .65 | .60 |
| 2　乗　和 | 2.33 | 1.58 | 3.91 |

業料が安いから」や「通学に便利だから」などの項目を含んでいたため「経済的・地理的要因（$\alpha$＝.65)」とした（$\alpha$係数は4月の調査によるもの)。

その他の尺度については，同時期に行われた予備校生対象の調査データ（$N$=362）の分析結果や，第1回調査の結果をもとにして検討を行い，その結果を第2回調査にも適用した。模擬試験の認知は，主成分分析（Varimax回転）における解釈可能性から，「模試の結果を信頼している」や「模試の合格判定を重視している」など負荷の高かった5項目からなる「模試の重視（$\alpha$＝.77)」と，「模擬試験は必要だと思う」や「模擬試験を積極的に利用したい」など3項目からなる「模試の必要性（$\alpha$＝.68)」の2因子とした（Table 1)。志望校に対する認知は，主成分分析（Varimax回転）における解釈可能性から，「何があっても第一志望の大学に行きたい」や「将来のことを考えると志望校に妥協はできない」などの4項目からなる「第一志望へのこだわり（$\alpha$＝.70)」と，「自分の成績に応じて受験校は柔軟に変えるべきだ」や「自分の学力にあった受験をするべきだ」などの3項目からなる「志望校に対する妥協（$\alpha$＝.50)」の2因子とした（Table 2)。受験に関する自己の認知

Table 3　受験に関する自己認知の主成分分析（Varimax回転）の結果

| 項　　目 | I | II | $h^2$ |
|---|---|---|---|
| 受験勉強の量 | .79 | −.01 | .63 |
| 要領のよい学習法 | .73 | .15 | .55 |
| 受験用の能力 | .68 | .25 | .53 |
| その大学にあった対策 | .68 | .17 | .49 |
| 受験に向けて生活を整える努力 | .63 | −.24 | .46 |
| 潜在的な能力 | .02 | .82 | .68 |
| 運の強さ | −.02 | .63 | .40 |
| 本番での集中力 | .35 | .54 | .41 |
| 2　乗　和 | 2.61 | 1.54 | 4.15 |

は，主成分分析（Varimax回転）における解釈可能性から，「受験用の能力」や「受験勉強の量」など4項目からなる「努力認知（$\alpha$＝.75)」と，「運の強さ」と「潜在的な能力」と「本番での集中力」の3項目からなる「能力認知（$\alpha$＝.47)」の2因子とした（Table 3)。「運の強さ」が，「潜在的な能力」や「本番の集中力」といった能力と関連する因子に負荷が高かったことから，

受験における運の強さは能力のうちだという認知がされていることが示唆された。

いくつかの尺度については低いα係数も見られたが，項目内容を検討した結果，尺度間相関を探索的に検討をすることは可能であると判断しこれを用いることにした。

**パーソナリティ要因と大学受験に関する諸変数との関連**

各パーソナリティ要因と大学受験に関する認知との関連を検討する。調査ごとに分けて各変数間の相関と平均を示したものがTable 4－1とTable 4－2である。

まず，達成動機について検討する。自己充実的達成動機は，第1回では，特定大学志望動機の「内容の充実」($r$=.21, $p$<.05)，「自己実現」($r$=.38, $p$<.01)，志望校認知の「志望校へのこだわり」($r$=.28, $p$<.05)，模試認知の「必要性」($r$=.30, $p$<.01) などと正の相関があり，第2回でも，特定大学志望動機の「自己実現」($r$=.38, $p$<.01) と正の相関があった。競争的達成動機は，第1回では，特定大学志望動機の「内容の充実」($r$=.35, $p$<.01)，志望校認知の「志望校へのこだわり」($r$=.33, $p$<.01)，模試認知の「重要性」($r$=.25, $p$<.01) と「必要性」($r$=.28, $p$<.01)，第2回では，志望校認知の「志望校へのこだわり」($r$=.34, $p$<.01) と正の相関があった。相関のパータンは，第1回と第2回で顕著な違いはなかったといえる。

自己充実的達成動機は，「他者・社会の評価にはとらわれず，自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機」であり，競争的達成動機は，「他者をしのぎ，他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機」である（堀野・森，1991)。自己充実的達成動機の高い者は，自分の適性や興味あるいは将来の職業との関連などといった「自己実現」を重視した上で「大学の内容」を評価し志望校を決定しているのに対して，競争的達成動機の高い者は，自己実現とは関係なく，大学そのものの校風や社会的評価，学問水準の高さなどの「内容の充実」のみを重視して志望校を決定していると解釈できる。いずれの達成動機も志望校に対する「こだわり」と正の関連があるが，自己充実的達成動機の高い者が「自己実現」の手段として志望校にこだわりを持っているのに対して，競争的達成動機の高い者は「大学」そのものにこだわりを持っていると解釈できる。また4月のデータからは，

**Table 4－1　パーソナリティ要因と大学受験に関する諸変数との相関（4月）**

| | 特定大学志望動機 | | | | 志望校認知 | | 模試認知 | | 自己認知 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 内容充実 | 自己実現 | 合格可能性 | 経済・地理 | こだわり | 妥　協 | 重要性 | 必要性 | 能力認知 | 努力認知 |
| 自己充実的達成動機 | .21* | .38** | .12 | .13 | .28** | .04 | .01 | .30** | −.01 | .16 |
| 競争的達成動機 | .35** | .00 | −.02 | .10 | .33** | .04 | .25** | .28** | −.07 | .13 |
| テスト不安 | .10 | −.11 | −.17 | .19 | .05 | .12 | .19* | .10 | −.32** | −.31** |
| 内的統制(I) | −.09 | .15 | −.05 | .02 | .19* | −.01 | .08 | .32** | .09 | .09 |
| 強力な他者の統制(P) | .21* | −.11 | −.06 | .07 | −.06 | .24** | .05 | .00 | .03 | −.07 |
| 運の統制(C) | .14 | −.05 | .04 | .16 | −.04 | .34** | −.01 | −.05 | .14 | −.10 |
| *Mean* | 3.11 | 3.90 | 2.43 | 2.98 | 3.69 | 2.90 | 3.28 | 4.15 | 3.13 | 2.52 |
| *SD* | 0.84 | 0.86 | 1.03 | 0.91 | 0.75 | 0.76 | 0.63 | 0.57 | 0.61 | 0.67 |

$N$ = 116～120　*$p$<.05　**$p$<.01

**Table 4－2　パーソナリティ要因と大学受験に関する諸変数との相関（9月）**

| | 特定大学志望動機 | | | | 志望校認知 | | 模試認知 | | 自己認知 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 内容充実 | 自己実現 | 合格可能性 | 経済・地理 | こだわり | 妥　協 | 重要性 | 必要性 | 能力認知 | 努力認知 |
| 自己充実的達成動機 | .10 | .38** | −.05 | .01 | .14 | .02 | −.05 | .11 | .06 | −.03 |
| 競争的達成動機 | .20 | −.13 | .06 | −.05 | .34** | .12 | .10 | .17 | −.10 | −.03 |
| テスト不安 | −.08 | −.08 | −.09 | .00 | .01 | .24* | .12 | .13 | −.26* | −.15 |
| 内的統制(I) | −.15 | .07 | .10 | .08 | .10 | −.03 | .05 | .03 | .23 | .15 |
| 強力な他者の統制(P) | −.02 | −.20 | −.02 | .05 | .05 | .04 | −.06 | −.02 | −.05 | −.08 |
| 運の統制(C) | −.02 | −.12 | .09 | .00 | .06 | .02 | −.01 | −.05 | .07 | .02 |
| *Mean* | 3.28 | 4.19 | 2.57 | 2.90 | 3.64 | 2.96 | 3.27 | 4.08 | 3.11 | 2.74 |
| *SD* | 0.68 | 0.72 | 0.88 | 0.89 | 0.72 | 0.72 | 0.60 | 0.54 | 0.62 | 0.62 |

$N$ = 71～74　*$p$<.05　**$p$<.01

自己充実的達成動機の高い人は，模試の必要性を高く認知してるが，成績や合格判定といったその結果を重視して志望校を決定しているわけではないのに対して，競争的達成動機の高い人は，模試の必要性を高く認知し，合格判定などの結果を重視して志望校を決定しているという意思決定の過程が示唆された。

テスト不安は，第1回では模試認知の「重要性」($r$=.19, $p$<.05) と正の相関が，自己認知の「能力認知」($r$=-.32, $p$<.01) と「努力認知」($r$=-.31, $p$<.01) と負の相関があった。第2回では志望校認知の「妥協」($r$=.24, $p$<.05) と正の相関が，自己認知の「能力認知」($r$=-.26, $p$<.05) と負の相関があった。第1回と第2回の間に顕著な相関のパターンの違いはなかった。テスト不安の高い人は，大学受験に関して自分の能力や努力の不足を高く認知しているといえる。また，テスト不安の高い人は，志望校を妥協しやすいことが示唆された。

I・P＆Cについてみると，第1回では「内的統制」が志望校認知の「こだわり」($r$=.19, $p$<.05) や模試認知の「必要性」($r$=.32, $p$<.01) と正の相関があった。また志望校認知の「妥協」は，「強力な他者による統制」($r$=.24, $p$<.01) と「運による統制」($r$=.34, $p$<.01) とに正の相関があった。また「強力な他者による統制」は特定大学志望動機の「内容の充実」とも正の相関があった ($r$=.21, $p$<.05)。しかし第2回では有意な相関はいずれにおいても確認されなかった。自分の力を信じてベストを尽くそうとする内的統制の高い者が，志望校に対してこだわりを持っている一方で，強力な他者や運など影響を信じている外的な統制の高い者が志望校に対して妥協しやすいことが示唆された。しかしこの結果は一貫しておらず，この点に関しては今後さらなる検討が必要であるといえる。

**合格可能性の認知とリスク志向性**　本研究の目的は，大学受験の意思決定における合格可能性の認知について検討することであった。しかし，特定大学志望動機のうち「合格可能性」は，4つの因子の中で最も低い値を示した。受験生は志望校の決定に際して，相対的に見ると合格可能性は重視していないことを示す結果であった。しかしこの質問項目が5件法であり，その中間付近の2.43と2.57という得点を示していることから，まったく重視していないわけではなく，合格可能性という要因も志望校の意思決定に影響を与えるものであるといえる。

まず一般的な確率判断における合格可能性の認知的な歪みを測定する項目（予備校の模擬試験で合格可能性が20%，50%，80%と判定されたとき，あなた自身はその合格可能性を何パーセントくらいだと思うか）について，被験者が回答した値から客観的な合格可能性の確率を引いた値を「確率判断の偏り」として算出した（Table 5）。この値が正の場合には，主観的確率が客観的確率よりも高いことを示している。客観的な合格可能性が低いときにはやや高めに判断され，客観的な合格可能性が高いときにはやや低めに判断されているといえる。しかし，その偏りは非常に小さく模試における合格可能性は一般的にはほぼ偏りなく主観的にも認知されているといえる。ただし，$SD$が大きいことから，確率判断の偏りは個人差が大きいといえる。

**Table 5　確率判断の偏り**

| | 第1回調査[a] | | | 第2回調査[b] | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 20% | 50% | 80% | 20% | 50% | 80% |
| *Mean* | 2.53 | 1.13 | −3.29 | 2.97 | 3.78 | −0.68 |
| *SD* | 15.18 | 14.56 | 14.37 | 12.85 | 11.10 | 13.12 |

a：$N$ = 119，b：$N$ = 74

そこで，この確率判断の偏りと，パーソナリティ要因や大学受験に関する認知との関連を検討するために第1回調査と第2回調査それぞれについて相関を検討した。その結果，ほとんどの変数とは一貫した有意な相関は得られなかった。しかし，特定大学志望動機の「自己実現」や自己認知の「能力認知」との間には，$r$= .20〜.27程度の有意な正の相関があり，これは第1回調査と第2回調査ともに共通した特徴であった。自己実現の側面を重視して志望校を決定している者や，自分は能力を持っているのだと考えている者が，予備校の客観的な合格可能性を主観的には高く認知していることが示唆された。この「確率判断の偏り」の項目は，自分の成績とは無関係な一般的な合格可能性判定に対する認知的な偏りの個人差を測定する目的で設定した。しかし，これらの項目に対して，志望動機や自己認知との関連があったことから，これらの設問に対して，自分自身の合格可能性に対する認知的な判断が投影されたことが示唆される。

そこで，自分自身の合格可能性について，どのような認知がなされているのかを検討するために，質問紙調査時に記入した志望校と，模試で記入した志望校とが一致した被験者について主観的な合格可能性と客観的な合格可能性との関連を検討を行った。第1回調査では117名中70名が，第2回調査では74名中33名の志望校が一致していた。第2回調査で一致していた人数は少なかったため第1回調査について検討した。

客観的合格可能性が$Mean$=25.4 ($SD$=22.2) であるのに対して，主観的合格可能性は$Mean$=36.2 ($SD$=19.5) であった。これらには正の相関があった

($r=.47$, $p<.001$)。主観的合格可能性が，予備校の模試による合格可能性の判定から推測されているといえる。また，「自分の合格可能性に対する確率判断の偏り」は $Mean=12.4$ ($SD=21.8$) であり，大きく正に歪んでいた。Table 5 に示したように，一般的な合格可能性が，ほぼその数字通りに認知されているのに対して，自分の合格可能性は主観的には高く認知していることが明らかになった。元吉(1998)は，受験直前に主観的な合格可能性が高く見積もられていることを示しているが，直前でない時期においても主観的な合格可能性は高く認知されていることが示された。これは，自己へのポジティブ幻想 (Taylor & Brown, 1988) によるバイアスであり，受験生が合格可能性に対してポジティブ幻想を持つことを示しているといえる。ただし，被験者の客観的合格可能性の平均が低かったことから，このような傾向は合格可能性が低い場合における限定的な認知である可能性もある。

自分の合格可能性に対する確率判断の偏りとパーソナリティ要因や大学受験の認知との関連を検討したところ，特定大学志望動機の「自己実現」($r=.31$, $p<.05$)と，自己認知の「能力認知」($r=.32$, $p<.05$)との間に正の相関があった。自己実現を重視して志望校を決定している者や，自分は能力があるのだと認知している者が，客観的には合格可能性が低くても，主観的合格可能性を高く偏って認知していることが明らかになった。合格可能性に関するポジティブ幻想が，自己実現に関する期待や，自己に対する高い能力認知によって起こっていることが示唆された。また，この結果は一般的な確率判断の偏りで確認された結果が，自分の合格可能性に対する判断を投影した結果であることを示唆するものでもある。つまり，自己実現を重視して志望大学を決定している者や，自分は能力があるのだと認知している者は，自分がその大学に合格に対してポジティブな期待を持っている。その結果，主観的合格可能性を客観的なものよりも高く見積もることになる。そして，一般的な合格可能性というものに対しても主観的には高い認知をしているのだといえる。

大学受験に関するリスク志向性は，もし一年間に1校しか大学を受験できなかったとしたら，第一志望の大学の合格可能性が何パーセント以上あればその大学を受験するかを問うものであった。この数値が低いほどリスク志向性が高いといえる。リスク志向性は第1回は，$Mean=64.4$ ($SD=17.22$)，第2回は，$Mean=62.8$ ($SD=17.43$) であった。つまり，約60%程度の合格可能性がある場合に，その志望校を受験すると判断していた。元吉 (1998) の調査におけるリスク志向性の平均は41.9%であり本研究の調査のリスク志向性はこれに比べて約20%低い結果となった。これは，リスク志向性が変動しやすいものであり，調査時期によって異なることを示唆するものである。リスク志向性と他の指標との相関を検討したところ，志望校認知の「妥協」と負の相関があることが確認された(第1回：$r=-.21$, $p<.05$；第2回：$r=-.32$, $p<.01$)。これはリスク志向性が高い受験生は，志望校を妥協したくないと考えているということを示すものである。現役生は，受験まで比較的時間のある時期においてはリスク志向性が低いといえる。しかし，受験が近づくにつれて，志望校の妥協をしたくないと思っている者はリスク志向性が高くなっていくという過程が示唆された。

**合格可能性の認知と意思決定**　Table 4－1とTable 4－2に示したように，特定大学志望動機の中では，合格可能性は最も重視されていなかった。また，この合格可能性は，パーソナリティ変数とは関連がなかった。そこで成績との関連を検討したところ，第1回調査では，有意な正の相関が ($r=.23$, $p<.05$)，第2回調査でも，傾向ではあるが正の相関が得られた ($r=.22$, $p<.10$)。同様に他の志望動機についても成績との関連を検討したが，それらについては有意な関連はなかった (Table 6)。これは，成績がよい受験生ほど，受験する大学・学部を決定するに当たって合格可能性を重視しており，逆に成績がよくない受験生は，合格可能性を重視せずに志望校を決めるという意思決定過程を示唆するものである。また，成績と客観的合格可能性との間には，強い正の相関があった (第1回$r=.50$, $p<.001$；第2回$r=.62$, $p<.001$)。このことからも，成績のよくない受験生が，合格可能性を重視していないことが示されたといえる。

成績がよければ，それだけ合格可能な大学・学部も増え選択肢も増える。したがって志望動機としては，合格可能性ではなく，自己実現，内容の充実といった要因を重視して意思決定を行うことができるはずである。しかし実際には，成績のよい場合に合格可能性を重視し，自分が合格可能な大学・学部を志望していた。本研究の被験者の多くは，国公立大学を第一志望とする現役高校生

**Table 6　特定大学志望動機と成績との相関**

| | 特定大学志望動機 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 内容充実 | 自己実現 | 合格可能性 | 経済・地理 |
| 第1回成績 | .11 | −.04 | .23* | .12 |
| 第2回成績 | .12 | −.05 | .22† | .03 |

*$p<.05$　†$p<.10$

であった。国公立大学を第一志望とする受験生でも，多くの人が私立大学などを合わせて受験している。国公立大学を第一志望とする場合には，成績のよい人は，「自分が合格できそうな大学」を選択しており，成績のよくない人は，「自分の行きたい国公立大学」を志望し，合わせて私立大学を受験するという意思決定過程が示唆された。しかしこの点については，実際の受験校や志望校の難易度などのデータによってさらに検討する必要がある。

本研究は，サンプル数が少なかった上に，第2回目の調査では欠損データが多かった。また現役生のみを分析の対象としていた。結果を一般化するためにはより多くのデータについて検討を行い，大学受験の意思決定過程において合格可能性の認知が与える影響について明らかにしていくことが必要である。

## 引用文献


荒木紀幸　1988　青年版テスト態度検査（TAI）の標準化に関する研究　日本教育心理学会第30回総会発表論文集，480-481.

渕上克義　1984a　大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究　教育心理学研究，**32**，228-232.

渕上克義　1984b　進学志望の意思決定過程に関する研究　教育心理学研究，**32**，59-63.

権藤与志夫　1974　高校生の進路決定に関連する諸要因に関する調査研究　九州大学教育学部紀要，**20**，105-121.

堀野　緑　1987　達成動機の構成因子の分析　－達成動機の概念の再検討－　教育心理学研究，**35**，148-154.

堀野　緑・森　和代　1991　抑うつとソーシャルサポートの関連に介在する達成動機の要因　教育心理学研究，**39**，308-315.

井上健治・上野一彦・野口裕之　1975　大学受験と高校生活（Ⅰ）　東京大学教育学部紀要，**15**，103-129.

Levenson, H. 1981 Differentiating among internality, powerful other, and chance. In H. M. Lefcourt (Ed.), *Research with the locus of control construct.* New York: Academic Press.

元吉忠寛　1998　大学受験に対する合格可能性の認知と意思決定　日本社会心理学会第39回大会発表論文集，208-209.

下山晴彦　1984　ある高校の進路決定過程の縦断的研究，教育心理学研究，**32**，206-211.

鈴木規夫・柳井晴夫　1993　因果関係モデルによる高校生の進路意識分析　教育心理学研究，**41**，324-331.

田中　豊　1995　数量表現による予測と意思決定　－主観的確率からみた意思決定－　実験社会心理学研究，**35**，118-123.

Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin,* **103**, 211-222.


（2000年9月16日　受稿）

## ABSTRACT

# Perception of probability of success and decision making in entering university : An exploratory study of senior high school students

Tadahiro MOTOYOSHI

The entrance examination for universities involves risk. Sometimes, people call it "examination war" or "examination hell" in Japan. The purpose of this study was to investigate the effects of risk perception and the evaluation of probability of success on decision making in entering university. Subjects were 121 third-year senior high school students (12th grade). They responded to the following questionnaire item sets twice: personality scales (e.g., achievement motivation), motivation toward entering university, evaluation of performance in the practice examination, evaluation of the likelihood of being accepted into the university of prime choice, extent of thier ability and efforts, and evaluation of the probability of their success in entrance examination. The grades they achieved on the practice exam was available. The results indicated that the students attained high grades attached great importance to the probability of success, and they made a decision based on this probability. Subjective probability of success was evaluated higher by students than the objective probability which was evaluated by the practice trial.

Key words: risk perception, decision making processes, motivation toward entering the university